

## 「モモ」になるのです。

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン  
「今日のフォーカスチェンジ」第2372号  
(2010年4月27日発行)より

「かめおかさんにとって、『聴く』ことの最終目標は何ですか?」。最近、ときどき、こんな質問をいただきます。

そのつど、いろいろにこたえていたのですが、これが一番わかりやすいかなあと  
思う、こたえが見つかりました。それは、  
「『モモ』のように聴けるようになること」

そう。ミハヤエル・エンデ作『モモ』の主人公モモです。  
こんなくだりがあります。(大島かおり訳)

「モモに話を聞いてもらっていると、どうしてよいかわからずに思いまよっていた人は、きゅうにじぶんの意思がはっきりしてきます。ひっこみ思案の人には、きゅうに目のまえがひらけ、勇気が出てきます。不幸な人、なやみのある人には、希望とあかるさがわいてきます」

もちろん、これは物語のなかのできごとです。実際には、なかなかそんな聴きかたはできるものではありません。でも、めざしたいなあ。そう思っています。

そして、このお話まるごとそのままでも、ある程度、そこに近づけることはできると、思っているのです。

ひとは、どんなときに勇気が湧くのか。元気が出るのか。もちろん、いいことがあったときや、自分で自分をふるいたたせるときもそうでしょうが、私は、「ひとに信頼されていると感じるとき」ではないかと思うのです。

目の前にいるひとが、無条件に、絶対的に自分を信頼してくれる。そのまなざしを感じたとき。

無条件にとあえてただし書きをつけたのは、私たちは、いつも無意識に相手をジャッジしてしまうからです。このひとのこういうところは、信頼できる。こういうところは、信頼できない…というふうに。

これは、逆から見ると、こういうときは、信頼してもらえなくても、こういうときは、信頼してもらえない…ということになり、ひとは、安心して、自分をさらすことができなくなるのです。

安心して自分をさらすことができなくなると、どうしても萎縮してしまいがちになり、行動も起こしにくくなるものなのです。

モモは、何ももっていない、住む家さえない、ちいさな女の子でした。ひとびとにとって、モモは、損得の「駆け引き」をする対象ではありませんでした。

だからこそ、ひとびとにとって、モモは、「なんでも聴いてもらえる」存在だったのです。

モモには、相手を信頼しているという意識はなかったでしょう。でも、何ももたないモモは、その意味で、何かに価値判断をつける基準をもっていなかったということもできます。

だから、まるごと、まっさらに、ひとの話を聴けたのかもしれませんが、それが、結果として、相手に対する絶対信頼として伝わったのかもしれませんが。

まあ、そんなふうに物語を解釈してしまうと、ミモフタモアリマセンが、そんな解釈は置いて、とにかく、モモの聴きかたは、まちがいでなく、ひとを安心させるのです。そして、安心して、ひとは、自然に元気が出るのです。勇気も湧くのです。

そんな聴きかたをしたい。そんな聴きかたができるひとを、もっともっと増やしていきたい。そうすれば、私たちは、お互いにお互いを元気づけ、勇気づけあうことができます。

そしたら、いままで、できないと思っていたことにも、チャレンジできるようになります。そしたら、夢だって、どんどんかなっていきってしまうと思うのです。

私のちからはまだまだちいさく、この思

いを、十分に伝えることができいてません。正直なところ、そのことを、歯がゆく思うことがあります。

でも、あきらめずに、広めつづけたいと思っています。それが今回、私にあたえられた仕事のひとつだと思っているから…。

このメッセージを読んで、何かを感じてもらえたら、どうぞ、おちからを貸してくださいね。みぢかなところからでいいので、ぜひためてみてほしいのです。

絶対的な信頼をもって、相手の話を聴くこと。ことばの表面を聴くのではなく、相手の深いところを聴くこと。全身全霊で、まるごとの自分で、まるごとの相手を受け止めること…。

私たち一人ひとりが、「モモ」になるのです。ただ、聴く。それだけをとおして。

あなたの「聴く」を信頼します。  
あなたの「聴く」を、祝福します。  
こころからの祈りを、このメッセージをとおして、あなたに贈ります。

●日刊メールマガジン「今日のフォーカスチェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、**2003年11月1日**創刊。**2010年2月2300**号達成。3秒で読める携帯版もあり。無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>